

知的障害当事者の共感を促すナラティブ・コミュニティ

—知的障害当事者どうしが他者の語りに傾聴・共感した時、新たな語りは生み出される—

○ 立教大学大学院博士後期課程 杉崎 敬 (8006)

キーワード：知的障害、ナラティブ、ナラティブ・コミュニティ

1. 研究目的

本報告は、知的障害当事者たちの「語り」のやり取りの場において、時として、語る側／語られる側の「語り」の内容には相互に共感が見られることがあるが、その共感を促す要因となるものは何かを質的研究によって明らかにするものである。

2. 研究の視点および方法

知的障害当事者たちが、知的障害をもつ当事者としての想いを、語らなかつた／語れなかつたという現実、様々な要因によって「言葉」を奪われた当事者たちがいるということを示している。周囲の人びとに自分の想いを語っても聞いてもらえずに、社会的マイノリティのレッテルを貼られた当事者たちが、当事者どうしの中で、その想いを語り始める。

人が生きる世界において、「言葉」がとても重要な役割を果たし、その「言葉」が「語り」あるいは「物語」という形式をとるとき、とても大きな力をもつことが注目されるようになった(野口 2002)。ナラティブ研究では、アイデンティティの構築過程で話をすることや、「語り」が重要な役割を果たすことが指摘され、集団的アイデンティティも個人的アイデンティティも共にナラティブ形式を通して、継続的に再構築され演じられるということが分かってきた(Natalia Gerodetti, Jo Eadie 2004=2006)。

本研究では、知的障害当事者の本人活動に参加する当事者3者による語り合いの場を、当事者どうしのナラティブの表出の場とした。また、野口(2005)のいう「ナラティブ・コミュニティ」としての位置づけを採用するならば、彼らの「語り」の相互作用のあり様を確かめることもできるのではないか。ナラティブ・コミュニティは、単にひとつの物語を共有し再生産する場ではなく、それを新たに展開させていく場で、「新しい語り」「いまだに語られなかつた語り」を生み出すための場として捉えられる(野口 2005)。知的障害当事者たちは、当事者どうしの語り合いの中で、他者の「語り」をどう傾聴し、自身の「語り」をどのように語るのか。その際には、どういった「語り」の内容であった場合に、どう共感するのか。こうした視点から、当事者たちの「語り」のやり取りの行方を論じたい。

研究方法は、知的障害当事者の本人活動に参加するAさん(30代・男性・軽度)、Bさん(50代・男性・軽度)、Cさん(40代・女性・軽度)に、①家族(親・きょうだい)に関する事柄、②当事者に関する事柄、③施設職員に関する事柄、④仕事に関する事柄、⑤セクシュアリティに関する事柄、⑥本人活動に関する事柄、⑦知的障害であることに関する事柄について、3者に自由に語り頂き、各々の「語り」の内容と、他者の「語り」を聞いた後に共感した「語り」の内容を記録した。考察するにあたっては、ライフストーリー法を用いた。調査期間は、2012年3月～6月に、A県B地域における本人活動の場において、合計5回にわたる聴き取り(約2時間前後)を実施した。

3. 倫理的配慮

本報告に際して、個人が特定されることの無いよう個人名・団体名は全て匿名とし、当事者の方々には事前に各々了承を得た。また、日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守し、あわせて人権等にも最大限の配慮をして、聴き取りを実施した。

4. 研究結果

①家族(親・きょうだい)に関する事柄(C→A：ある程度の共感示す)

Cさんの母・姉に対する複雑な語りに、Aさんが自身の母との思いを重ね合わせて共感。

②当事者に関する事柄(A=B=C：3者共にある程度の共感を示す)

他の本人活動の会の当事者や作業所に通う当事者の話、全国大会で出あった当事者の話など、共通の友人や知人の話題を3者で共有した語りを繰り返す。

③施設職員に関する事柄(B→A：共に強い共感を示す、C：2人の話にある程度の共感を示す)

以前の作業所では「職員は忙しい時にはあまり話をしてくれなかつた」と語るBさんに対して、「職員は、下から見ている感じで、実際は上から見下ろしているような感じ」と強い口調で主張するA

さん。Cさんは「世話人さんや職員さんは話を聞いてくれないわけではないけど…」と、2人の語りと若干の温度差を示すものの、「(私は)女の子だから、生理とかそういうのが来た時に、私はどうしても汚してしまうんですね。血がついているっていうのは分かるんだけど、それをどう処理していいの全然わからない。職員は『汚さないようにしてちょうだい』って言うけど、汚さないようにするには、どうしたらいいのかが全然分からないんですよ」と職員に対する戸惑いを語った。

④仕事に関する事柄(A=B=C：3者共に強い共感を示す)

Aさんが職場で、有給休暇を取るか否かという話を上司とした際に「障害者の権利を主張する立場なわけだから、有給はちゃんと主張すべきだ」と上司に言われ、自分はもっと働きたいのに、なぜ障害者というだけで、強制的に有休を取らせるのか。という話に、Cさんは現在勤めている職場で「1時間近くトイレに入っていたら、理由も聞かず店長に叱られた」と語り、職場のジョブコーチの人は全然ダメであると語る。それを聞いていたBさんは「なんだよ～ジョブコーチって～、必要ないじゃない、何でそんなのつけてんの～、向こう(会社)の味方ばかりするしね～」と強く訴えた。

⑤セクシュアリティに関する事柄(A=B=C：3者共にある程度の共感を示す)

「恋愛には諦めがある。何だかんだ言っただって、所詮違うでしょう。障害者と健常者って」「仕事で言ったら全然お金の問題とか違う。いくら頑張ったって健常者には追い付かないし、お金の面で言うと(恋人と)付き合えない」と語るAさん。Aさんの語りを聞いていたBさんも続けて「(恋愛は)ちょこっとありますけどね～。4・5年前…。ちょっとやっぱり(相手が)嘘をつくからね。それでもう付き合いはやめたの」と語る。Cさんは「中学の時に好きな人がいて、付き合いたいと思ってただけど、うちの母親に反対されてしまったんですよ。同じ同級生(健常者)だったんですけど、母がその人に『障害者だから諦めて下さい』って言ったんですよ。それから恋というのが出来なくなかった」「例えば、現在好きな人がいても、今度は多分妹が入ってきて邪魔をされたしまう」と語る。Aさんも「こういうこと言っちゃ～差別になるかもしれないけど…。例えば、同じ障害者を持っている人と恋愛すると、俺多分負担になると思う。自分のプライベートで相手の負担を抱えたくない。それは相手にもよるだろうけど、負担は抱えたくない」と、3者共に複雑な思いを語った。

⑥本人活動に関する事柄(A：ある程度の共感を示す、B・C：共に強い共感を示す)

Aさんの本人活動の会を起ち上げる経緯の語りを聞き、Bさんは「会に参加して、人の話を聞くことの大切さを感じた。それと、待つことの大切さを知った」と語り、Cさんは「私は横浜の本人会しか知らなかったのね。AさんやBさんは地域に会(本人会)があるけど、私の地域には無かった。何回か来るうちに、ここに来てもいいんだなって思いました。趣味は映画とかあるんですけど、それ以外、今何が楽しいかって言われると、この会は話せるから楽しいって感じですね」と語る。

⑦知的障害であることに関する事柄(A=C：共に強い共感を示す)

Aさんは「俺の場合(軽度の障害)は、出来ないといけないというプレッシャーがあって、職場の人たちは、Aさんだから出来て当たり前だろうと言う」と語る。それに対して、Cさんも「私もそういうのあるよ」と強く共感する。Cさんは「少しうつ状態になった時に、妹や職員さんに障害者だからと言って、暗くならないで『笑顔でいなさい』って言われる。笑顔を作らないといけないが、ホームに帰ったらすぐには笑顔になれない」と語り、Aさんも「それもあるかもね」と答えた。

5. 考察

7つの内容の語りの中で、「仕事」の内容に関する語りでは3者共に強い共感を示した。2者が強い共感を示した語りの内容は「施設職員」「本人活動」「知的障害」に関するものであった。また、3者共にある程度の共感を示した語りの内容は「当事者」「セクシュアリティ」であった。

つまり、当事者が強い共感を示した語りの内容は、仕事場での辛い労働や上司との関係、施設職員に対する不満、知的障害であることから様々な差別的な扱いをうけたことなど、辛い経験を共有している当事者ゆえに共感できるものである。また、本人活動については、当事者と関わり合うことによって得られた新たな感情を育てている。野口(2002)は「ナラティブ・コミュニティには多くの「聴衆」がいる。それぞれの語りをしっかり聴こうとする人たちがいる。こうした「聴衆」が存在することで、新しい語りはより確かな位置を占めることができる」と指摘する。本人活動の会における知的障害当事者が語り合う場は、ナラティブの表出の場となり、ナラティブ・コミュニティの可能性をもつ。これは、当事者たちの承認を得て共有された「語り」が定着する空間であるからではなからうか。